

(1) 教員養成に対する理念・構想・養成する教員像

【国際英語学科】

国際英語学科の教員養成に対する理念は次のとおりである。国際英語学科は、世界中の英語変種を認め合うという国際英語の視点に立つ英語指導の基に英語力の育成を図り、英語コミュニケーション能力の育成、コンピュータを駆使した英語による発表力の育成などにつとめ、さらに国際社会で求められる多様な専門知識や技術を獲得するとともに、汎用性を有する高度な英語力と異文化に対する深い理解や柔軟な対応力を有する国際人の養成を目的としている。

本学科には3つの専攻があり、それぞれに、英語圏文化、国際関係、言語の体系的理解を基盤としているが、とりわけ教員養成課程においては、これらの専攻の科目から万遍なく履修することを課している。その背景にある理念は前段に述べた学科の理念である。つまり、文化や国際性や言語にバランスのとれた深い理解を有する人材がとりわけ現代社会に必要であり、そのような人材の供給源たらんとする本学科が、中等教育におけるそのような人材の育成に対しても応分の責任を担わんと考えるのである。

前段に述べた教員養成に対する理念は、平成20年と平成21年に改訂された「中学校学習指導要領」ならびに「高等学校学習指導要領」の精神にも通じるものである。「中学校学習指導要領解説外国語編」は「1. 改訂の経緯」の中で、「知識基盤社会化やグローバル化は、アイデアなど知識そのものや人材をめぐる国際競争を加速させる一方で、異なる文化や文明との共存や国際協力の必要性を増大させている。このような状況において、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」をはぐくむことがますます重要になっている。」と指摘しており、本学科の理念とほぼ合致すると言って過言でない。体系ある伝統的学問知識を有しつつ、異文化や国際社会に対応する実践的能力を備えた人材を教育界にも輩出することによって、学習指導要領の精神に沿うだけでなく、本学科の社会における存在意義、責任を明確にしたい。

国際英語学科の教員養成に対する構想は次のとおりである。

ア. 構想の概要

本学科の教員養成課程においては、前節で述べた理念に基づき、中等教育段階にある生徒のあらゆる要求に対応し、普遍性と応用性のある能力を身につけた国際人を育成することができる教員を養成することを目標としている。そのため、教員養成課程にある学生には多彩な科目の中から万遍なく履修することを課すと共に、履修に際しては、科目群の中から個々が必要とする科目を自ら選ばせることによって、主体的に学び、自律的に行動する姿勢を身につけさせている。これにより、単に知識を教授するだけでなく、生徒に対する責任を常に自覚し、自己開発を継続し、「生きる力」を身をもって教えられるような教員を養成することを目指す。

具体的には、言葉に対する体系的かつ深い理解を背景とする確固たる英語運用能力を基盤とし、文化や国際社会、さらには英語教育に関する専門的知識を獲得した上で、それらを教育現場での実践に活かすことができる教員を養成したい。そのため、英語運用に関わる科目を重厚に配置する他、学士課程に配置されている海外研修などの科目も利用し、実践経験を多く積ませるよう配慮している。また、教職科目の多くが、学士課程の必修科目や選択必修科目となっており、教職課程に学ぶ意義と学士課程に学ぶ意義の平行性が理解できるような課程になっている。つまり、本学科の設立の理念の射程に教員養成が当然のこととして含まれることを学生は十分理解できるようになっている。

イ. 構想とカリキュラムの関係

上記の構想は様式2号に反映されている。各科目区分からの取得要件単位数は、英語学10、英米文学10、英語コミュニケーション10、異文化理解6、となっており、特定の科目群に偏ることがないように配慮している。その一方で取得要件の単位数は計36となっており、法令に定める基準を満たし、本学科の教員養成に対する理念を具現化するにふさわしい量と質を担保している。また、各科目群には教員養成に関わる科目を重厚に配置し、その中から選択必修させるシステムを採用している。特定の領域に偏向することを防ぎつつ、主体的に履修させることを意図している。また、教職科目に指定されている科目のほぼ全てが学科の固有科目であり、学士課程修了の先に教員免許取得を見据えることができるようになっている。これは本学科設立の理念を考慮すれば当然のことである。

各科目区分においては、該当する学問領域について体系的知識を習得できるとともに、それを教育現場で応用することまで

射程に入れた科目が配置されている。英語学においては、「国際英語入門」や「英語学概説Ⅰ・Ⅱ」などの学問体系を理解する科目に加え、「実用英語運用法Ⅰ・Ⅱ」などの実践系科目や、「言語システム論Ⅰ・Ⅱ」などの言葉に対する理解を深める科目を用意した。英米文学においては、概説科目「比較文学論」に加え、イギリスやアメリカの文学に特化した科目、さらに、英米以外の英語文学に関する講義も用意している。とりわけ、英米以外の英語文学についての講義を設置したことは、本学科の設立の理念を特に反映したものとと言える。英語コミュニケーションにおいては、4技能をバランスよく学べるよう科目が配置されている。それらの科目の多くがネイティブスピーカーによる授業であり、学生は日本語に頼ることなく、授業内容以外の場面でも英語を駆使して目的を果たさなければならない。真の応用力、汎用性のある英語運用能力を身につけさせることができる。異文化理解においては、いわゆる「国民性」や「民族性」といった一元的文化論を越えて、国際的に個人対個人の信頼関係を築けるような真の国際人を養成するために、個々が「異文化」を有しているという視点に立った「コミュニケーション論」の基本から、「国際社会言語学Ⅰ・Ⅱ」のような国際社会のダイナミズムまでを理解できる科目を用意している。

ウ. カリキュラム運営体制

中京大学においては、大半の学科が教職課程を有しており、それらを統括する組織として、各教職課程の代表者で構成される全学レベルの「教職課程委員会」を組織している。同委員会においては規程を整備すると共に、定期・不定期に委員会を開催することによって、各教職課程が適切な運営を行っているか、大学としての教員養成の理念や、社会的責任に照らして監視している。また、各課程が設置されている学部においても、教職課程委員を中心に、課程運営の改善を随時行うと共に、それらを全て教授会に報告することによって学科全体が教員養成に関与する体制を整えている。また教職課程委員は各教職科目での指導内容について把握し、それらが課程設置の趣旨に照らして適切かどうか監視し、必要に応じて科目担当者と意見交換を行っている。

(2) 認定を受けようとする課程の設置趣旨（学科等ごと）

【国際英語学科】

従来、国際英語学部は、英米文化学科と国際英語学科に分かれていたが、2014年度より英米文化学科が国際英語学科に統合され、これに伴い、英米文化学科に開設されている科目の多くが国際英語学科に組み込まれることになった。教職課程にあってはこれを好機ととらえ、教職科目の追加にとどまらない課程の見直しを行った。国際英語学科の教職課程に組み込まれることになった科目に限らず全ての教職科目が、国際英語学科ならびに教職課程の理念に照らして、改めて見直され、体系的履修を担保できる形で編成されている。とりわけ、各科目群のバランス、科目群の中での履修について十分配慮し、より幅広く、そして関心ある学生により深く学修させられるような課程を実現した。本学科の教職課程の歴史は長く、多くの教育関係者を輩出し、地域からも一定の評価を頂いていると自負しているが、時代の要請に即応した新しい学士課程、そして教職課程が、これまで以上に社会の信頼を得ることができるものとする。また、本学科は単に従来の「英文科」の延長上にあるものではなく、現代的視点に立った国際人の育成を目標としており、時代の変化に柔軟に対応できる真に国際性ある教員を輩出することによって、教育界に対し、これまでにない有為な人材を提供できるものとする。

《中学校教諭一種免許状：英語の設置趣旨》

本学科においては、4技能を高める科目を豊富に提供するとともに、海外研修を奨励するなど、積極的にコミュニケーションを図る姿勢を身につけさせている。また、国際英語の理念に従い、欧米に限らず英語の変種を認めることを通じ、あらゆる言語や文化を偏向なく受容する姿勢を身につけさせている。これらは、中学校学習指導要領外国語科の目標（「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。」）と合致するものである。さらに、ネイティブ・スピーカーによる英語のみの授業を多く取り入れることによって、平易な英語を駆使してコミュニケーションを図ることを実践させているが、これは、初歩的な英語を用いてコミュニケーションさせることを重視している中学校指導要領の英語における目標（第9節第2）と合致するものである。

上記等に鑑み、本学科の教育課程の延長上に中学校教諭が見据えられるのは自然の成り行きでもあり、とりわけ学習指導要領が目標とする教育の達成に本学科の卒業生が寄与できるものとする。

《高等学校教諭一種免許状：英語の設置趣旨》

高等学校学習指導要領は、外国語科の目標を「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う。」としている。本学科の教育課程においては4技能の向上やコミュニケーション能力の向上は無論のこと、言語やコミュニケーションに対する体系的理解を促進する科目を多数用意している。これらは教壇における説明力に繋がるものであり、生徒の「的確な理解」や「適切に伝える」能力の育成に大いに寄与するものと考えられる。また、中学校に引き続き掲げられた「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深める」態度の育成についても、国際英語学を中心とした言語全般に対する学問的理解を発揮し、高校生に相応しい理解を促進する授業を展開できるものと考えられる。

上記等に鑑み、本学科の卒業生が高校教育界に貢献できる可能性は十分であり、本学科に高等学校教諭一種免許状の取得課程を設置することは、本学科の社会に対する貢献の重要な柱であると考えられる。